

【五所川原市立五所川原第三中学校区】

学校名	校長・氏名	担当者職・氏名
五所川原市立栄小学校	校長 小笠原 洋二	教諭 倉内 貞行
五所川原市立三輪小学校	校長 會津 隆史	教諭 佐藤 文子
五所川原市立五所川原第三中学校	校長 秋元 裕教	教諭 中田 伸大

I 校区の概要

五所川原市は青森県西部にある市で、津軽半島の中南部、津軽平野のほぼ中央に位置する。南には津軽富士として親しまれる岩木山を臨み、岩木川が貫流する自然に恵まれた市である。五所川原第三中学校区は、小学校2校と中学校1校があり、現在の児童生徒数は栄小学校365名、三輪小学校208名、五所川原第三中学校282名となっている。

1 各校の教育目標とめざす学校像

(1) 栄小学校

- ① 教育目標  
「自分の未来を主体的に切り拓いていく子どもの育成」

- ② めざす学校像  
「楽しみや喜びのある学校」  
「子どもを伸ばす学校」  
「家庭や地域から信頼される学校」  
「安心・安全な学校」

(2) 三輪小学校

- ① 教育目標  
「心やさしく、たくましく生きる児童の育成」
- ② めざす学校像  
「子どもが行くのを楽しみに思える学校」  
「保護者が安心して任せられる学校」  
「保護者や地域と、子どもの実態、変容、実践を共有できる学校」  
「地域づくりに貢献する学校（地域学校協働活動、コミュニティ・スクールの推進）」

(3) 五所川原第三中学校

- ① 教育目標  
「夢をもち学びを続ける心豊かで健康な生徒」
- ② めざす学校像  
「信頼される学校」  
「活気ある学校」  
「魅力ある学校」

II 研究の概要

1 本事業の目的

近年、不登校児童生徒数は増加傾向にあり、その内訳を見ると新規不登校児童生徒の増加が著しく、新規不登校児童生徒の増加を抑えることが不登校児童生徒全体の減少につながると考えられる。そのため、本事業では「安心して学べる環境づくりの推進」と「小中の円滑な接続に向けての連携」が、不登校やいじめ等の未然防止に有効であり、新規不登校児童生徒の減少につながることを調査研究により明らかにすることが目的である。不登校児童生徒全体を減少させるためには、継続不登校児童生徒への個別支援を行うことも重要な視点であるが、本調査研究の目的ではない。あくまでも「安心して学べる環境づくりの推

進」と「小中の円滑な接続に向けての連携」を通し、その結果として新規不登校児童生徒を減少させることを効果指標としている。

## 2 研究の進め方

小学校4～6年生、中学校1～3年生全ての児童生徒を対象とし、年4回の意識調査を行い、その結果を踏まえてPDCAサイクルを実施し、取組の見直し、修正、追加等を行い、「安心して学べる環境づくりの推進」と「小中の円滑な接続に向けての連携」を教育活動全体の中で計画的・組織的に行った。

### (1) 児童生徒の意識調査

5月、7月、12月、3月の年4回、児童生徒は、「学校が楽しい」、「みんなで何かをするのは楽しい」、「授業に進んで取り組んでいる」、「授業がよくわかる」の4つの質問に、「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまらない」、「当てはまらない」の4件法で回答した。

### (2) 年3回のPDCAサイクル

児童生徒の5月の意識調査の結果から、各学年の強みや課題を考察・分析し、それに基づいた具体的目標として、各学年で4つの質問項目の1つを重点項目とし、その重点項目の目標値を設定した。それを達成するための手立てを学期ごとに立て、次の意識調査まで実践し、重点項目の「当てはまる」の児童生徒の割合から取組の浸透度を確認し、取組の見直し、修正、追加等を行った。

## 3 「居場所づくり」と「絆づくり」の取組

「居場所づくり」は、児童生徒が安心でき、自己存在感や充実感を感じられるように教職員が児童生徒の居場所を作り出し、「絆づくり」は、その居場所で主体的に取り組む活動を教職員が意図的に作り、児童生徒が自ら絆を紡いでいくものになる。つまり、絆を紡いでいくのは児童生徒自身で、その場所を作り出すのは教職員となる。このことを、中学校区の教職員で共通理解を図り、児童生徒が安心して生活することができる「居場所づくり」を教職員が進めるとともに、児童生徒自身が絆を紡いでいけるように主体的な活動に取り組ませるようにした。

## Ⅲ 1年目の研究

令和4年5月の意識調査では、小学校、中学校とも「みんなで何かをするのは楽しい」という児童生徒の割合が他の項目より高く、学校行事、授業などの学校生活の様子からも人間関係が比較的良好であると感じた。この「みんなで何かをするのは楽しい」という児童生徒が多い点を生かし、1年目は学校行事等を通してよりよい人間関係づくりに力を入れた。そのよりよい人間関係を、授業中のグループ活動や対話的な活動に生かし、授業理解につなげようと考えた。その上で、「安心して学べる環境づくりの推進」を図り、「授業に進んで取り組んでいる」、「授業がよくわかる」の児童生徒の割合を高めていくことにした。一方、「小中の円滑な接続に向けての連携」として、五三中学区研の四部会（学習指導部会、生徒指導部会、保健指導部会、特別支援部会）における共通実践を増やしていった。授業の学習課題を青色チョークで、まとめを赤色チョークで囲むことや学校生活のキーワード「あ・じ・み・こ・し」、言葉の基本五箇条の設定、児童生徒交流会や小中のチューター学習会、一日体験入学の実施などを行った。そこで、中学校区として、「行事を通してのよりよい人間関係づくり」「校内研究計画の仮説検証を通して学べる環境づくり」「五三中学区研の四部会における共通実践」の3つに力を入れ、研究に取り組むことにした。

しかし、令和4年度から令和5年度にかけての中学校区の不登校児童生徒数の推移をみると、小学校6年生、中学校1年生で新規不登校児童生徒数が増加する結果となった。

※ 学校生活のキーワード「あ・じ・み・こ・し」とは…

「あ」…挨拶 「じ」…時間を守る 「み」…身なり、身だしなみ

「こ」…言葉遣い、心遣い 「し」…姿勢

※ 言葉の基本五箇条とは…

- ・元気に挨拶『おはようございます、こんにちは、さようなら』
- ・感謝の気持ちは『ありがとうございます』
- ・まちがい・あやまちは『すみません、ごめんなさい』
- ・返事ははっきり『はい』
- ・話し方はていねいに『…です、…ます』

## IV 2年目の研究

1年目の研究結果から、2年目の研究では毎日の授業に特に力を入れ、それを通して「安心して学べる環境づくりの推進」に取り組むようにした。研究1年目に中学校区で取り組んできた「行事を通してのよりよい人間関係づくり」「校内研究計画の仮説検証を通して学べる環境づくり」「五三中学区研の四部会における共通実践」の3つの実践は変えずに、児童生徒が授業の中で「絆づくり」ができるようにしていこうと考え、「授業がよくわかる」を中学校区共通の重点項目として設定した。

### 1 各校での共通の取組

中学校区3校ともに、共通して毎日の授業改善は五所川原市教育委員会が作成した授業デザイン「GOLD22」、「授業改善ルート7」をもとに、生徒指導の実践上の視点（自己存在感の感受、共感的な人間関係の育成、自己決定の場の提供、安全・安心な風土の醸成）を取り入れた各校の研究計画によって進めるようにした。また、小学校6年生、中学校1年生の新規不登校児童生徒の増加が著しかったことから、「五三中学区研の四部会における共通実践」に力を入れた。

※ 授業デザイン「GOLD22」とは…

学習環境（学習規律、教室環境、人間関係、言語環境）、指導計画（学習過程の設定、授業のねらいの焦点化と課題設定、学習活動の焦点化、指導の手立て、評価の方法）、学習活動（問題の把握・課題設定、見通し、教師の説明、個人の考え、協働での思考、まとめ、振り返り）、指導方法（板書の工夫、ノートの工夫、資料・機器・手法、机間支援、認める、教師の指導言）に分け、授業をデザインする22のポイントが書かれたもの。

※ 「授業改善ルート7」とは…

授業デザイン「GOLD22」の学習活動（問題の把握・課題設定、見通し、教師の説明、個人の考え、協働での思考、まとめ、振り返り）を抽出したもので、授業改善のための実践事項が書かれたもの。

### 2 各校の2年目の取組

#### (1) 栄小学校

- ・「職員用生徒指導だより」を発行し、生徒指導に関わる情報共有を行った。特に「発達支持的生徒指導」についての記事を多くし、担任等が教室での児童の居場所づくりを意識できるようにした。
- ・月末に教職員が自身の指導について振り返る場を設定した。集まったデータをもとに分析・考察を行い「職員用生徒指導だより」で共有するとともに、全体としての今月の重点を明確化した。
- ・校内研究の授業づくりに関する研究内容の中に「生徒指導の実践上の視点の意識づけ」を明記し、日常的に授業における生徒指導の充実を図った。
- ・校内研究において、伝え合う力の育成に取り組んだ。その中で「相手の話を最後まで聞くこと」「自分の意見をはっきりと伝えること」などを全学年を通して指導し、他者との対話的な活動のよさを実感できるようにした。
- ・児童会活動では、児童が主体的に計画し実行できる活動を年に1つは行うようにし、主体的に学校生活をより豊かにするための経験ができるようにした。



栄小学校  
【1人1台端末の活用】



栄小学校  
【道徳の意見交換】

#### (2) 三輪小学校

- ・五所川原市教育委員会が作成した授業デザイン「GOLD22」をもとに、グループやペアによる学習形態を継続して取り入れ、対話を重ねながら学び合う場を作った。
- ・小集団の中で「分かること」も「分からないこと」も共有できる安心感をもたせ、学習（授業）への意欲向上を図った。
- ・既習事項とのつながりを確かめる場や課題設定の場で、児童同士や児童と教師とのやりとりを活発にし、

学習課題解決への意欲を高めた。

- ・学校生活のキーワード「あ・じ・み・こ・し」に取り組み、規範意識の向上を目指した。
- ・中でも重点目標を「あいさつ」にし、『明るいあいさつの声がいっぱいの学校』を目指すために、児童による定期的なあいさつ運動（委員会毎、学級毎、リトル JUMP チーム）、校長先生による下校時の児童玄関でのあいさつ、先生方による休み時間の校内でのあいさつや生徒指導上支援を要する児童への声がけを積極的に行った。



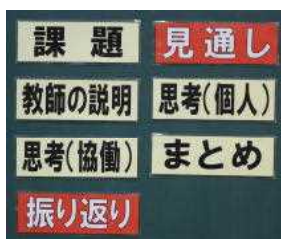
三輪小学校  
【児童同士のやりとり】



三輪小学校  
【あいさつ運動】

(3) 五所川原第三中学校

- ・「授業改善ルート7」を用いた授業改善をするために、問題の把握・課題設定、見通し、教師の説明、個人の考え、協働での思考、まとめ、振り返りのそれぞれのプレートを作り、授業でそのプレートを活用するようにした。
- ・計画的にグループ活動、話し合い活動を授業に取り入れ、聞き合う関係や認め合う関係を作り、学び合う関係づくりを行った。
- ・学校生活のキーワード「あ・じ・み・こ・し」を常に生徒に意識させ、学校生活を送らせるようにした。
- ・運動会を通してよりよい人間関係づくりをするために、縦割りの対抗戦をするなど異学年交流を行った。
- ・委員会活動、学校行事等を通して、生徒が主体的に取り組むことができる場や機会を設定し、生徒同士の絆を深めていくようにした。
- ・朝の挨拶運動やちょこっとボランティア（チョコボラ）などを通して、人間関係づくりを進めた。



五所川原第三中学校  
【授業プレート】



五所川原第三中学校  
【授業での話し合い活動】

V 成果と課題

1 各学校における意識調査の分析及び考察

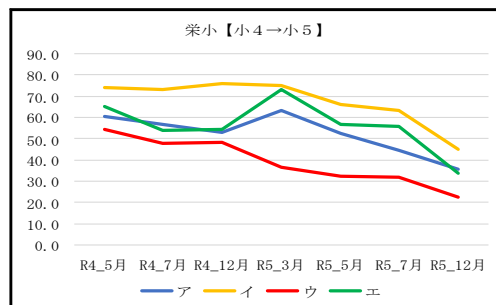
意識調査の結果から、特に3回目（令和4年12月実施）と7回目（令和5年12月実施）の数値の変容について分析及び考察を行った。

ア 学校が楽しい	イ みんなで何かをするのは楽しい
ウ 授業に進んで取り組んでいる	エ 授業がよくわかる

(1) 栄小学校

【小4→小5】

	R4 5月	R4 7月	R4 12月	R5 3月	R5 5月	R5 7月	R5 12月
ア	60.6	56.7	53.0	63.5	52.3	44.4	35.5
イ	74.2	73.1	75.8	75.0	66.2	63.5	45.2
ウ	54.5	47.8	48.5	36.5	32.3	31.7	22.6
エ	65.2	53.7	54.5	73.1	56.9	55.6	33.9

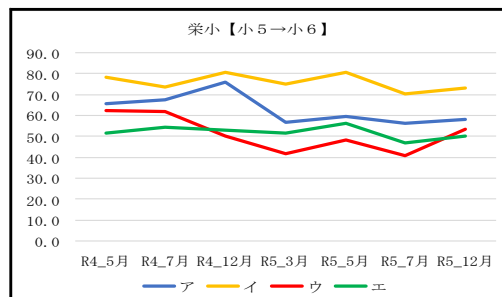


年間を通して、数値の低下が顕著に見られた。「ア 学校が楽しい」、「イ みんなで何かをするのは楽しい」の低下については、中学年から高学年としての役割を求められている感覚から自信を失ってしまっ

た可能性や、学級編成のため学級集団としての居場所づくりにやや時間がかかっている可能性が高いものとみられる。「ウ 授業に進んで取り組んでいる」、「エ 授業がよくわかる」の低下については、5年生になり、学習内容が難しくなってきた、活躍ができていないという感覚があるものと推測される。

【小5→小6】

	R 4 5月	R 4 7月	R 4 1 2月	R 5 3月	R 5 5月	R 5 7月	R 5 1 2月
ア	65.6	67.6	75.8	56.7	59.7	56.3	58.3
イ	78.1	73.5	80.6	75.0	80.6	70.3	73.3
ウ	62.5	61.8	50.0	41.7	48.4	40.6	53.3
エ	51.6	54.4	53.2	51.7	56.5	46.9	50.0

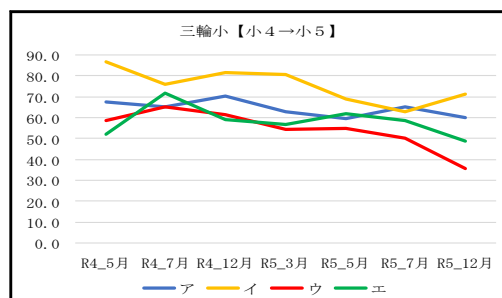


年間を通して、数値の低下傾向が見られた。「ア 学校が楽しい」、「イ みんなで何かをするのは楽しい」の低下については、6年生に進級後、最高学年としての役割を求められている場面が多くなったことが影響しているものと考えられる。「ウ 授業に進んで取り組んでいる」、「エ 授業がよくわかる」については、低下傾向が見られていたが、6年生の2学期に入ると徐々に数値の上昇が見られた。学習内容は難しくなっているものの、授業に進んで取り組む児童が多くなり、授業に対する理解度も徐々に高まっているものと捉えている。

(2) 三輪小学校

【小4→小5】

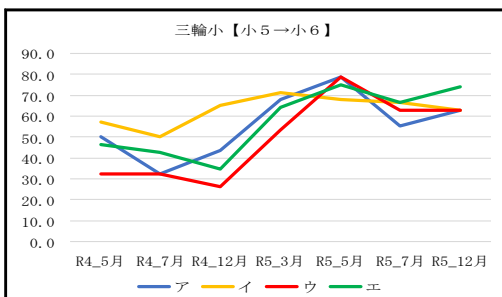
	R 4 5月	R 4 7月	R 4 1 2月	R 5 3月	R 5 5月	R 5 7月	R 5 1 2月
ア	67.4	65.2	70.5	63.0	59.5	65.2	60.0
イ	87.0	76.1	81.8	80.4	69.0	63.0	71.1
ウ	58.7	65.2	61.4	54.3	54.8	50.0	35.6
エ	52.2	71.7	59.1	56.5	61.9	58.7	48.9



「ウ 授業に進んで取り組んでいる」の数値が低下してきている。学習内容が難しくなり理解できているか自信をもてないでいることが考えられる。「イ みんなで何かをするのは楽しい」の数値は昨年度から高いまま推移し、案を出したり活動したりすることに積極的である。

【小5→小6】

	R 4 5月	R 4 7月	R 4 1 2月	R 5 3月	R 5 5月	R 5 7月	R 5 1 2月
ア	50.0	32.1	43.5	67.9	78.6	55.6	63.0
イ	57.1	50.0	65.2	71.4	67.9	66.7	63.0
ウ	32.1	32.1	26.1	53.6	78.6	63.0	63.0
エ	46.4	42.9	34.8	64.3	75.0	66.7	74.1



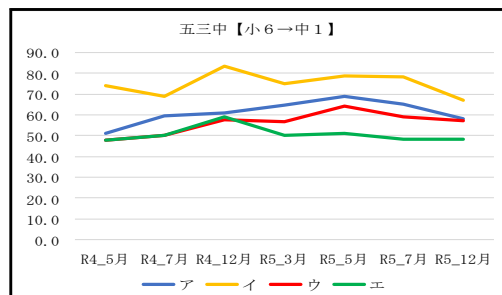
意識調査3回目（令和4年12月実施）までは自己評価が低い傾向にあり、実態と少し違っていたが、5年生が主体となって行った6年生を送る会后から自信をつけ、さらに春からは6年生としての自覚をもち、学校生活への意識が肯定的になった。その良好な傾向が続いている。



(3) 五所川原第三中学校

【小6→中1】

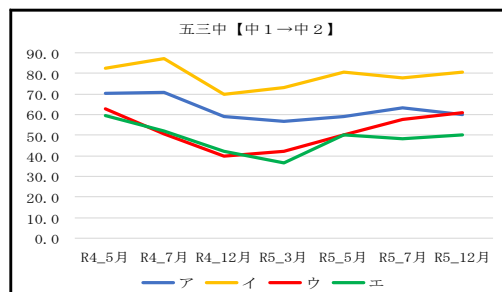
	R 4 5月	R 4 7月	R 4 1 2月	R 5 3月	R 5 5月	R 5 7月	R 5 1 2月
ア	51.0	59.6	61.1	64.8	69.0	65.1	58.2
イ	74.0	69.1	83.3	75.0	78.6	78.3	67.1
ウ	47.9	50.0	57.8	56.8	64.3	59.0	57.0
エ	47.9	50.0	58.9	50.0	51.2	48.2	48.1



全体的に数値の変動が見られたが、意識調査3回目（令和4年12月実施）と7回目（令和5年12月実施）を比較すると、どの質問項目も数値が低下した。これは、中学校に入学し、新しい仲間との人間関係づくりでの悩み、学習内容の難易度が徐々に上がってきたことなどが影響していると考えられる。

【中1→中2】

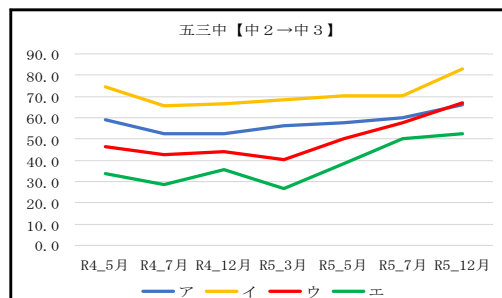
	R 4 5月	R 4 7月	R 4 1 2月	R 5 3月	R 5 5月	R 5 7月	R 5 1 2月
ア	70.3	70.9	59.0	56.7	59.0	63.5	59.8
イ	82.4	87.3	69.9	73.3	80.8	77.6	80.5
ウ	62.6	50.6	39.8	42.2	50.0	57.6	61.0
エ	59.3	51.9	42.2	36.7	50.0	48.2	50.0



意識調査3回目（令和4年12月実施）からの数値を見ると、どの質問項目も数値が上昇傾向にあった。2年生に進級するにあたり、学級編成が行われ新しい仲間・環境でのスタートとなったが、本研究の様々な取組の結果、新たな人間関係づくりや安心して学べる環境づくりが上手にいき、その成果があらわれた結果だと考えられる。

【中2→中3】

	R 4 5月	R 4 7月	R 4 1 2月	R 5 3月	R 5 5月	R 5 7月	R 5 1 2月
ア	59.3	52.4	52.4	56.1	57.7	60.3	65.9
イ	74.4	65.5	66.7	68.3	70.5	70.5	82.9
ウ	46.5	42.9	44.0	40.2	50.0	57.7	67.1
エ	33.7	28.6	35.7	26.8	38.5	50.0	52.4



意識調査3回目（令和4年12月実施）からの数値を見ると、どの質問項目も数値が上昇傾向にあった。本研究の様々な取組の結果、最高学年として学校を引っ張っていこうという気持ちが高まり、よりよい人間関係づくりや安心して学べる環境づくりが上手にいき、その成果があらわれた結果だと考えられる。

2 五所川原第三中学校区における意識調査の分析及び考察

意識調査の結果から、特に3回目（令和4年12月実施）と7回目（令和5年12月実施）の数値を用いて、五所川原第三中学校区の同一集団の変容について分析及び考察を行った。

ア	学校が楽しい	イ	みんなで何かをするのは楽しい
ウ	授業に進んで取り組んでいる	エ	授業がよくわかる

	小4→小5		小5→小6		小6→中1		中1→中2		中2→中3	
ア	60.0⇒45.8	↓↓↓	67.1⇒59.8	↓	61.1⇒58.2		59.0⇒59.8		52.4⇒65.9	↑↑
イ	78.2⇒56.1	↓↓↓	76.5⇒70.1	↓	83.3⇒67.1	↓↓↓	69.9⇒80.5	↑↑	66.7⇒82.9	↑↑
ウ	53.6⇒28.0	↓↓↓	43.5⇒56.3	↑↑	57.8⇒57.0		39.8⇒61.0	↑↑	44.0⇒67.1	↑↑
エ	56.4⇒40.2	↓↓↓	48.2⇒57.5	↑↑	58.9⇒48.1	↓↓↓	42.2⇒50.0	↑	35.7⇒52.4	↑↑

※ ↑↑ : 10P以上の上昇、↑ : 5～10Pの上昇、↓ : 5～10Pの低下、↓↓↓ : 10P以上の低下

小学校4年生から小学校5年生、小学校6年生から中学校1年生の質問項目で、数値の大きな低下が見られたものがあった。これは、学級編成が行われ新しい仲間・環境でのスタートとなり、居場所づくりに時間がかかったことや新たな人間関係づくりでの悩みがあったことが影響していると考えられる。また、学習内容の難易度も上がっていき、授業の中での「わかる」「できる」という実感を得ることができなかった可能性がある。小学校6年生から中学校1年生では、中学校での教科担任制への戸惑いや各教科で出される宿題の多さへの対応に苦慮したことも考えられる。

小学校5年生から小学校6年生、中学校1年生から中学校2年生、中学校2年生から中学校3年生の質問項目で、数値の大きな上昇が見られたものがあった。これは、よりよい人間関係づくりの推進、授業の中での安心して学べる環境づくりの成果であると考えられる。

### 3 成果

- (1) 生徒指導の実践上の視点でペア活動やグループ活動を取り入れた授業を行うことで、共感的な人間関係の育成につながった。その共感的な人間関係から安全・安心な風土の醸成につながり、その結果児童生徒の絆づくりに寄与した。
- (2) 研究2年目の同一集団の変容を見ると、重点項目にしていた「エ 授業がよくわかる」の意識調査の数値が大幅に上がった学年があり、取組の成果があらわれた。
- (3) 小・中学校9年間で児童・生徒を育てていくという教職員の意識が高まり、小中の円滑な接続に向けての連携強化につながった。

### 4 課題

- (1) 五所川原第三中学校区共通の重点項目にしていた「エ 授業がよくわかる」の意識調査の数値が目標値まで達しなかった。その要因を明らかにし、課題解決を図る必要がある。
- (2) 小学校4年生から小学校5年生、小学校6年生から中学校1年生において、質問項目の数値が大幅に下がるところがあり、その要因が何なのか、どのように改善を図っていけばよいのかを具体的に検証し、改善を図る必要がある。また、「安心して学べる環境づくりの推進」だけではなく、「小中の円滑な接続に向けての連携」を更に強化していく必要性も感じた。

### 5 調査研究のまとめ

【令和5年度 長期欠席者（欠席30日以上）の状況】												
栄小	小4	小5	小6	三輪小	小4	小5	小6	五三中	中1	中2	中3	
新規数	1	1	0	新規数	0	0	1	新規数	4	7	4	
継続数	0	1	2	継続数	0	0	1	継続数	5	7	5	

(令和5年度児童生徒指導状況報告書「4月～12月」より)

令和5年度の長期欠席者の状況は上記のとおりである。

このうち新規数について、五所川原第三中学校区全体の数値を前年度3月の新規不登校児童生徒数と、各学年ごとに比較すると、小学校では、4年生1名（前年比±0）、5年生1名（前年比±0）、6年生1

名（前年比－3）であり、本事業の取組の成果が見られたものとする。一方、中学校では、1年生4名（前年比±0）、2年生7名（前年比＋5）、3年生4名（前年比＋3）であり、「小中の円滑な接続に向けての連携」において一定の成果が見られたものの、中学校全体の新規数が減少するという期待した成果は得られなかった。

2年間にわたる本研究事業は今年度で終了となるが、これまでの研究の振り返りを行い、不登校未然防止の取組を継続し、新規不登校児童生徒が減少していくように授業や学校行事等の教育活動全体で、「安心して学べる環境づくりの推進」と「小中の円滑な接続に向けての連携」を行っていきたい。